慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代剣道に対する一考察(2)
Sub Title	A Comment on modern kendo (2)
Author	金子, 国吉(Kaneko, Kunikichi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1970
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.10, No.1 (1970. 12) ,p.25- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00100001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代剣道に対する一考察(2)

金　子　国　吉*

慶応義塾体育研究所紀要（第9巻，第1号，昭和44年12月，慶應義塾体育研究所）において「近代剣道に対する一考察」についての技術の整理，教習方法の意味の足らざるところを補足し，更に意とするところを述べてみたい。

「剣道学」（金子近次）[(1)]の剣道界の2つの思想についての文を引用しながら，その概略を説明すると次の通りである。

私は前回において剣道はスポーツであるとの観点にたち，その理由について説明を試みてきたが，しかし現在においても非スポーツ論，スポーツ論の2つの思想が続いていることは明らかである。それはすなわち社会状勢の変化，剣道修得者の年令差，ならびに修得の目的，過程等々に起因するものであろうが，「剣道学」においても次のように述べている。

1. 剣道は剣の術である。剣を巧みに運用し，自己を防禦し，敵を攻撃する術である。もともと剣の術の目的は生存競争の手段のため発達したものであり体育運動のため発達したものでない，その目的は根本的に異なる，従っていかにして攻撃防禦の術を運用するかを研究し，技術の上達を計らなければならないものであり，肉体ならびに精神の面はこの術の上達に伴う副産物であり，非合理的なこともやむを得ないものである。換言すれば刀剣の運用術に基礎をおいた竹刀の操法の修得であり，他の要素と結びついた「武」の観念である。

2. 剣道の発生，発達の過程においては，なるほど攻撃防禦のためであったかも知れないが，現代においては体育運動の一環として実施されるべきもので，技術はこの目的を達する手段，方法であって，従って体育運動からみて不合理な方法は矯正し，これがために技術の発達が妨害となってもやむを得ない。換言すれば竹刀の操法を基礎とした技術の修得であり「スポーツ」の観念である。

このような2つの思想については，その意とするところに勿論それぞれの理のあることは当然である，しかしこれらの思想については剣道修得者の思想によって判断されるべきものであろう。剣道にかぎらず思想について無視できないものは時代の背景という問題である。すべての現象というものは，その時代を背景にして生ずるものである。その時代背景を無視しては，

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

その価値を充分に発揮することはできない，ということである。剣道においてもその価値を発揮するという意味は，その時代を背景として，時代に適合しなければならない，社会に適合するということは社会に迎合することではない，社会的現象というものは変化し，進歩を重ねるものであり，その現象の理法に合致しなければならないということである。合致し調和してはじめてその真価が発揮されるということである。従って剣道という手段によって体育運動の目的を達し，精神の発達を期するということがもっとも妥当であり，これが剣道はスポーツであるとの論にも関連をもってくる。換言すれば，技術の上達は肉体の強健に求められ，次に精神の強さを必要とするからである。長い伝統のもとに発達した剣道の理法が，それが刀剣の理であれ，竹刀の理であれ，体育運動の理に反する理法があるとは考えられない，また反する理法が実施されているとすれば，それは間違っており，剣道の理法が正しく実施されていないことである。剣道の理法と体育運動の理法は当然合致すべきものである。このような考え方にたてばスポーツ論，非スポーツ論を論ずること自体に意味はない。意味があるとすれば，より精神面の強調であり，武術への郷愁であり，近代剣道の誤った解釈であると考えられる。他のスポーツにおいても技術的な面と精神的な面とが一体となって発達していることから考え，剣道のみが古い武道観にさまたげられ（倫理観，宗教観）特殊なものであるとする思想には賛成できない。それは排他的思想にもつながるものであろう。近代剣道の実体はスポーツである。

更に刀剣の操法が実戦の場をはなれ，いかにスポーツ化の傾向をたどってきたかをみると，徳川時代中期に「柔道大成録」〔寛延2年(1749年)，渋川伴五郎時英〕に「真の仕合といふものは相互に真剣をもって勝負を決し，一方息絶えて是迄という限りが見ねば誠の勝ちたるにてもなく……然るに今時の人の仕合といふものを見れば……革太刀，木刀をもって太刀打の真似をして見たりして，其間聊か当り外れを争ひ其勝負を分けて，それにて実の勝負の試しが済むと心得て居候……今時の人のする試合は畢竟遊事同然なることにて云々」とある。更に「剣道の発達」（下川　潮）[(2)]にもこの間の事情について次の通り述べている。

「此の頃は真剣は一切使用せず革太刀，木刀の試合である。当時，面，小手のやうな防具が充分発達せず危険も多く，従って形式的試合に流れ，実用的な刀剣の操法からはなれ，形剣道となる。正徳，宝暦（1711，1751）に至り現在のやうな防具，竹刀が工夫されるも社会的背景が武術の必要性を失ひ，形式的となり，この間，武術と宗教との結びつき，武士階級による独善性と，精神面への比重が重くなり，本来の刀剣の運用技術は益々形式的となってくるのである。徳川末期にいたり，特に竹刀の長さが長くなり諸流の組織した刀法も長竹刀のためくずれるようになり，安政3年（1856年）幕府講武所規則覚書に『撓は柄共総長さ曲尺にて三尺八寸より長きは不相成云々』という禁令が発せられるやうになったが，長竹刀の影響は大きい。

明治年間に入り，武士階級の消滅，西洋文化の流入，其他の社会的要因により武道は社会的

に忘れられた存在となったが，やがて，明治政府により，学校，軍隊，警察における武道の再興策と共に再び隆盛となる，然しこれは武術といふより体育運動の一環として隆盛となるのであり，従って実用的といふより，競技剣道の隆盛へとつながってくるのである。」

と述べている。更に日本剣道形にふれて，

「剣道の形といふことは剣道の仕方である，剣道の技術中もっとも多く実施される撃突の方法であり，有利な方法を組合せたものである。形は各流派によって異にし，流派の特徴を表はしたものである。日本剣道形は大正元年（1912年）大日本武徳会，東京高師が協議し，武徳会が主となって制定したものである。従来の形は最初の形の意義を没却し，形のための形に変化し，形としてのみ行はれ，実戦に応用することは余り考慮されず教習されることが多くなってゐたのである。

形は活用することにより，何本にも応用することができ，実戦を基礎として制定したものである。これにより古来二百余流に分れた各流派も統一され，近代日本剣道の基礎となり現在にいたってゐるのである。その目的とするところは，姿勢を正確にし，技癖を去り，太刀筋を正しく，動作を機敏軽捷にし，撃突を正確にし，撃突距離を知り，気位を高め，気合を練り，意識を明瞭にする等々であり，当初は盛んに形を実施し，後に試合を実施したものである。」

と説明している。

以上のように剣道の時代経過を簡単にみただけでも，近代剣道はいかに競技のための竹刀の運用法に発展してきたか，また更に競技においても，競技場の制約，審判制度の改革，竹刀の制限，時間制限等々ますます刀剣の操法である実用性をはなれ諸種の制約を受け，近代的競技剣道として興隆し，実施され，現在にいたっているかは理解できるものであろう。

このように刀剣の操法から全く遊離したともいえる竹刀操法の近代剣道において，スポーツ論，非スポーツ論はおのずと解答がなされるであろう。

更に技術の再分類についての考え方としても，以上の発展的経過から考えて現在実施されている剣道の技術というものは，また教習方法というものは唯一の正しい方法であるとは断定できない。それはどこまでも剣道の一つの形であり方法であり，別の技術に対する考え方，すなわち諸種の制約を受けた近代競技剣道の新しい技術，教習方法があっても何ら不思議ではない。専門家の剣道や専門家を目的とする教習者の剣道の技術が，また教習方法のみが唯一の正しい剣道であり，その他は剣道の本筋を離れた技術であるとするのは，独善的思想にもつながるものであろう。それはどこまでも剣道の中の一つの方法であり，形であり，教習方法であるにすぎない，近代競技剣道の一流派であるともいえる。従って一般の教習者が，それの模倣のみに終始することは練習量やその教習目的から考えても適切ではない。一般教習者は剣道をよく理解し，実施されている技術を分析し，別の教習方法を考え，欠点を補足し技術を高めることは当

然必要である。特に格技においては個人対個人の闘争であることから考えても一つの方法のみにこだわることは進歩を止めることであり，同じ方法では専門的な豊富な練習量に勝ることはできない。肉体的にも精神的にも技術的にも，より近代競技剣道の発展を計る意味において多種多様な方法があってしかるべきものであろう。技術の整理はこのような考え方を基礎とし，より自由な教習ができるものとして考慮したものである。

次に新しい整理の技術面について詳述してみたい。

剣道の実施は外面的にも内面的にも千変万化である。その動作は複雑である。しかし複雑な動作の中に共通な点が多く含まれているのである。剣道の基本的な動作ということは，必要な点，共通な点が合理的に組み立てられた動作である。すなわち基礎を（技術の）作る方法で約束的に構成したものである。また合理的な技術取得・矯正となり，更に準備運動，終末運動を兼ねるものであると考えてよい。基礎的な段階として

1. 容易である。
1. 確実に実施する。
1. 合理性に富まなければならない。
1. 動作に連関性がなければならない。

等々を内容として，その目的は，

1. 勢力の最小費消。
1. 精神上の安定。
1. 攻撃，防禦の迅速な動作。
1. 能率の発揮（無駄な動作を省く）。

を考慮する心要がある。

以上の目的から実際的な面をとりあげてみると

1. 各人の差があるも距離を遠くとる。
1. 左拳の位置，臍の一握下，一握前にあるも，いかなる動作のときも左右の腕の移動は少なくする。
1. 剣先の位置，相手の左眼付近につける，また高くなりがちな動き（竹刀をたてる）があるから低めにすること。このことによって動作の察知を少なくし，常に相手の身幅内にあり，自分の虚隙を少なくする利点がある。すなわち心持ち半身となり敵を右にみるようになる。
1. 体は相手と正対する。

等々に留意する心要がある。特に剣先については，剣先は不動のものではない。一定のリズムを保って振動するもので静止の状態はあり得ない。打突動作はこのリズムをもってなされるものである。剣先のリズムは呼吸を吐きながら下がり，吸いながら上がるのは自然である。従っ

て打突は吐きながら行なわれることが自然である。換言すれば相手の剣先の下がった時，吐き終わったときに打突を実施することにある。相手は呼吸を吸い吐きながら応ずる結果となり，一瞬の遅れとなり，応ずることは困難である。このような内面的な問題について更に詳しく述べてみたい。

「剣術の心理学的研究」(河野　毅)[3]を参考として考えてみたい。

剣道において「相手をよくみる」ということは非常に重要な要素であるとされている。この言葉の意味は外的な要素として相手の姿勢，態度，進退，動作等をよくみること，内的な要素として相手の心理的変化の察知をさすものであろうが，根本的には相手を打突しようとする，また打突されまいとする意識的状態をいうものであろう。このような状態において相手より受ける刺戟というものは視覚によってなされることは当然である。従って相手に対し視覚を強める動作，また弱める動作（動作の変化）が必要であり，反対に相手の刺戟に対する感受ということが大切となってくる。しかし感受性ということは先天的に受け継がれたもの以外は経験によって或る程度発達が促進されるもので，この感受性の程度いかんが技術の差を決する重要な要素を占めるものであろう。

人間は先天的に反射運動，衝動運動，その他いろいろな動作を有している。すなわち外部からの刺戟に対して自分の意志に関係なく運動を起こす(反射運動)。また心にある変化が生じた時にそれと同時に運動が起こっているような動作（衝動運動）を有しているが，剣道においてはこの反射運動，衝動運動が非常に大きな意味をもつものである。それは一瞬の中に消滅する動作を捕捉しなければならないからである。虚隙をみてこれを打突しようと思う心が起こった時はすでに動作が生じている衝動的な運動，相手の動作に関連する無意識な運動で，相手の打突を逃れ反撃する反射的な運動である。この衝動運動を細分すると衝動的意志作用，有意的意志作用，選択的意志作用とに分離され説明がなされている。

外部からの刺戟や，精神的・肉体的内部の刺戟を受けた時，その刺戟に順応して身体に変化を起こすのである。衝動的意志作用とは，打突しようとする瞬間，対手の動作をみて一瞬「危ない」という感情が生ずる，この感情が動機となって打突の動作に一瞬の変化が生ずる。仮に打突してもその動作はにぶい。これが衝動的な意志作用である。有意的意志作用とは，打突の動作を起こそうとして，面にするか，胴にするか，小手にするか，突きにするかということを考え，その中の一つを選ぶ作用である。すなわち面にも小手にも隙があることをみたとき，いずれも打突の可能性のあるときに面を選ぶ。これは一瞬の中に面，小手の2つの動機が表われ，これが意志の一方を圧迫し，注意から消滅し，一方に対する意志動作となり，これが外部作用に変化して打突となることである。衝動的意志作用に比べ時間を要するものである。選択的意志作用とは，数多くの動作の中から一つの動作を選択する作用である。剣道は常に複雑な選

択的意志動作を反覆するものであり，反覆することによって有意的動作に推移するものである。すなわち初心者が対手のどこを打突してよいか，いかなるときに動作を起こすか解らない，そのうちに相手に打突される。このような時間は練習を経過することによって刺戟の強弱が解り，次第に強いものが記憶に残るようになり，弱いものは消滅するようになる。選択が容易となり打突ができるようになるのである。更に相手の打突の心が映り，そのときはすでに打突動作が生じているようになる。衝動的動作になるのである。最初非常に思慮を要した動作が次第に容易な動作となり，遂に意志を要せずして動作を起こしうるようになるのである。このことの意味するものは，意志というものは練習を反覆することによって退化的発展に推移するということである。剣道においてはこのような意志の退化的発展という動作がもっとも望ましい状態である。

剣道において重要な要素を占めるものに「先」という専門用語が使用されているのであるが，これは「実」をとり相手の「虚」をつくことを意味するものである。相互に打突しようとする注意と打突されまいとする注意との闘争である。これについては無意識的な注意と意識的な注意との二つの作用が考えられるが，意識的注意の継続時間というものは非常に短いものである。勿論技術の程度，練習の程度等によって個人差というものは当然であるが，いずれにしても永続すべき注意力とはならないものであろう。従って一定の時間内において緊張と弛緩の二つの作用が繰り返し生じていることは当然である。換言すればこの緊張の頂点という状態が「先」であり，弛緩という状態の頂点が「虚」であろう。緊張の連続せる意識的注意をもって相手の弛緩の頂点を打突することがもっとも望ましい状態であり，有効な打突のチャンスであろう。しかしながら意識的な打突ということは，注意，緊張の頂点において実施されるが，それが動作として表現される瞬間にはすでに弛緩の方向に向かって下降線をたどっていることである。下降線をたどる弛緩の注意を瞬間的に緊張に転換せしむることは非常に困難である。緊張の度が強ければ強いほど弛緩の頂点もまた強いからである。このような状態を剣道においては「先」「対の先」「後の先」という語で説明されている。しかしこれを心理的な面からみて動作として表現された状態が客観的に考察された結果の判断について言ったものであろう。従って結果において打突されるということは不注意の状態であるということであり，反対に打突するほうからは注意の状態にあるということであろう。

次に打突のチャンスというものはいかにして感知できるかということであるが，これは相手からの刺戟によるものである。刺戟の変化の強弱と打突部位の面積である。しかし刺戟の変化というものは，それが同一の強弱が連続している場合に感知することは困難である。換言すれば虚が連続している場合に，それは虚であるが虚として感知することは困難であり，これに変化が生じた場合にはじめて虚として刺戟を受け打突のチャンスとなるのである。

人間が外的に刺戟を受けたとき，これに対して意志的行動を起こすまでには，若干の時間を必要とする。これは反応時間といわれている。反応時間というものは，視覚，聴覚，触覚等々の手段により，また種々の状況によって遅速が生じ同一ではない。剣道の場合は，視，聴，触による刺戟である。この刺戟に対し対応する動作となって表現されるまでの反応時間が大きな要素を占めることになることは当然である。従ってこの反応時間の短縮という問題が必要として生じてくる。それには第一条件として前述の注意力の緊張持続ということがあげられる。注意力の張弛ということは意識の内容に変化をもたらすものである。注意力の緊張の興奮は神経を刺戟し，鋭敏となり，動作が敏活となるからである。第二の条件として動作の順化と反覆の必要性である。剣道の動作は急速運動であり，巧緻運動であり，局所的には力技でもある。その打突は複雑な筋の作用を必要とするものである。従って初心者や練習不足のときは反応動作を起こすのに意志の参加を必要とする。それは運動神経の鋭敏さが不足しているからである。反応時間が長いのである。勿論年令差，個人差にもよって異なるが平均的にみた場合20才前後を頂点として35才くらいまでゆるく下降線をたどるとされている（特別の訓練を加味したときを除く)。反応時間短縮の進歩は幼年期において一番早く次に青年期であり，壮年期においては現状維持が困難で進歩は望めない。老年期は下降の一途をたどることは当然である。

このように内面的な反応時間の要素から考えても，剣道修得ということを考えた場合，幼年期より訓練に入り，壮年期において終了するものと考えてよいであろう(肉体的限度)。

「およそ人が心に思っている事柄は身体のどこかに必ず表われるものである」といわれているが，剣道の場合においてもこの言葉と同様，打突せんとする心は必ず身体のどこかに表われるものである。一般的に考えた場合，衣服等に覆われていない部分（露出部位)，すなわち顔面などはこれを感受するにもっとも便利な部位である。しかし防具装着の近代剣道においてこの感受には困難を伴うものである。従って「相手の眼を見る」という古来からの刀法の伝習基本は近代における競技形態剣道から考えた場合には非常に困難であり適当な指導方法とは言いがたいものであろう。眼を見て相手の動作を感知することは心技ともに高度に優れた者でなければ不可能に近い。不可能であるとすればそれに代わるべき他の方法を考える必要がある。眼を見ることを唯一の方法として強く教習者に要求することは，適当な指導方法ではないと思われる。眼により感知できる者は，いずれに着眼しても感受できるものであろう。換言すれば成熟者と未熟者の場合，相互に眼により感受できるものとすれば未熟者は成熟者の眼を見ないで他の部分をみた方が打突のチャンスが生ずるということが言えるかも知れない。人間の視野は視神経により増減するといわれているが，眼球の移動がなくても充分に相手の動作を看取し得る位置になければならないということである。「相手の眼を見る」という意味は近代競技剣道においては技術的な面は別として，精神的な意味をもたせ相手を圧迫する気慨に重点をおき説明指導が

なされる方が合理的な指導方法であると考えられる。消極的に相手の眼をさけるということは打突以前においてすでに気力において相手の圧迫を受け負けているからであり，打突もそれによって弱められるからである。各流派において「目付之事」として重要な部分を占めていることは真剣勝負，素面，素小手の場合において当然であるが，その内容は，敵眼を凝視してはいけない，「目付」は心である，横眼は不適当である，打突部位に眼を移してはならない，小手の動きをみる，剣先の動きをみる，「遠山の目付」等々の表現方法が説明されている。このような表現方法から考えても各流派において「目付」ということは単に構えたときにおける具体的な表現方法ではなく，むしろ精神的な面から説明したものであると考えた方が妥当であると思われる。次に具体的に近代剣道では相手のどこを主として注視するかということであるが，各派に受け継がれている「目付」の主な点を整理してみると，相手の顔面に着目し，面，小手等一定の部位に固定するものでなく，遠山を望むごとく頭上より足元にいたるまで注意を及ぼすことが重要であるということである。しかしこのような説明では焦点が合わず理解するに困難である。近代競技剣道においては相手をよく観察し，相手の動作が一番早く表現される部位を特に注意する必要があるのではないか，それは剣先と小手であろう。この2点を特に注意し相手の打突動作の起こりを察し，対応し，処置することが重要であろうと考えられる。古来より伝習されている重要な事柄は当然分類整理され近代剣道の指導教習に充分活用され，高度な操法が，指導法が完成されなければならないであろう。

剣道における技術差ということは，前述の選択的意志作用がいかなる程度まで退化し発展をとげているかということの差であろう。すなわち意志・動作が有意的であるか，衝動的であるか，反射的であるかということであろう。更にその動作というものが肉体的にいかほどに調和がとれたものであるか，意志の命令による筋肉の作用がいかに調和のとれた動きをするかということであろう。普通動作というものは極めて簡単なものであっても，全く意志に反した方向にしばしば表われるものであることから考えると，簡単な動作ということから技術差というものが表われ，以後の動作全般に重要な関連をもってくるということであろう。技術というものは自己の能力を自覚し，興味をもって修練することによって進歩するものである。いかなる説明もみずから感知するところに及ばないであろう。

次に実際的な指導，教習方法について一例をあげて説明してみたい（前回の論文と多少重複する個所もある）。

1. 基本動作としての体の移動について

体の移動を中心とした技術の分類という観点に立って考えた場合，それは当然前後，左右，斜めの体の運用が重点であり，この基本動作の指導教習に多くの時間をかける必要がある。特に前進，後退は勿論であるが，左右，斜めの移動についても充分実施する必要がある。従来は

前後の移動を基本とし，左右，斜めは応用として比較的少ない時間が当てられている傾向がある。単に体の移動のみでなく上体との関連性（剣先の振幅）を重視する必要がある。これは相手の動作により，これに応じようとする，打突しようとすることにより体の移動より先に腕のみの動きが早くなり相手に乗ぜられるからである(剣先が高くなる)。

新しい分類による攻撃技術の連続技(払い技を含める)，かつぎ技，接近技，片手技の方法については(個々の技術理論)従来の指導理論と比較していちじるしい変化を加える必要はない。技術理論の考え方の相違として払い技と連続技との区別を取り去ったにすぎない。上段技を片手技の範囲に含めただけである。重要な点は，

1. 相手との距離の計り方
1. 剣先の動き
1. 身体移動の察知
1. 虚実の捉え方

等々で，従来とは変わらない。しかしこれらの動作というものは個々の独立した動作の連続ではなく一連の継続した動作の一環であるということから考えて非常に困難な技術である。しかしこれらの継続した一連の調和のとれた動作というものは，攻撃，防禦の技術を有効に実施するためには，ぜひともに練習を重ねなければならないものである。これによって打突のチャンスが多く生まれてくるからである。

A. 連続技の教習について

表裏からの払い方，連続打突の最初の打突方法により緩急の打突動作を組み合わせる。連続技の打突については次の2通りの考え方を基礎として実施する。これにより体の運用もまた多少異なるからである。

(1) 最終打突が有効的であればよいとする連続打突。

(2) 連続打突のすべての打突が有効的でなければならない。すなわち個々の独立した打突の連続でなければならない。

(1)の場合の連続打突の実施を考えたときに，払い技が連続技の中に含まれることの意味は理解できるであろう。すなわち払い技の組み合わせによる払い方と第一打突は必ずしも有効である必要はなく，最終打突の有効性を生かすための準備的打突であるということである。

(2)については従来教習されている考え方であり，当然払い技は含まれない。それは払うという動作と打突という動作は区別されるべきものであるからである。従って新しい分類方法には適しない。一打突一打突に有効性をもたせるということは，換言すると連続打突中の個々の打突動作というものは独立した打突動作であり，それの連続したものであるにすぎないからであ

る。しかし剣道の技術動作というものは，内面的意味を含めるとすべて連続して実施されるものである。分離した動作というものはありえないことから考えると，連続技という名称を特別に付する必要はなく，基本打突において実施されてもよいのではないだろうか。

以上の二つの考え方の相違によって，その技術・動作もまた多少の変化をもつことは当然であろう。最終打突の有効性と一打突一打突の有効的打突では，おのずとその技術動作に相違のあることは当然である。この2通りの考え方がいずれが正しく，いずれが誤りであり，いずれがよく，いずれが悪いという問題ではなく，技術の指導教習というものは一方に偏した固定的観念をもって実施するということは不合理であり，進歩を遅らすものであるということである。打突のチャンスは一瞬の中に生じ，一瞬の中に去るものであることから考え，一瞬一瞬の動作の中に多様な技術を行使してはじめて進歩があり，勝利を得ることができるからである。近代剣道においては連続した二つの有効打突があっても，ルールによって得点は一つである。有効打突によって競技は中断されるからである。二つの連続した有効打突は必要でない。しかし相手に対する圧迫感や内面的な面からみた場合には，このような技術もまた一つの技術として必要であることは確かである。

他方最終打突の有効性を考えた場合，すなわち第一打突，払い方を準備的・予備的動作と考え最終打突の有効性をみた場合には，その最初の動作というものは一連の動作の中における一つの駆引きと考えてよい。距離のとり方における駆引きがある。虚実の駆引きがあると同様有効打突における駆引きと考えても何ら不思議ではない。要は打突目的として有効打突によって得点をあげることにあるからである。二つの考え方の結果は同じである。そのスピード性，安全性，確率性等々を考慮し実施することが必要であろう。技術の断定的指導にたよらず，教習については，よりわかりやすく，より自由に，技術教習の選択を与えることによって，近代剣道技術は発達につながってくるものであろう。

次に防禦技術について考えてみたい。新しい分類による大きな相違は従来の攻撃技術である「出ばな技」(出がしら技) を防禦技術の中に含めたことである。この理由については個々の説明の中で述べてみたい。

B. 防禦技術の教習について

防禦技術については前後，左右，斜めと体の移動を中心とした技術の分類に整理したものであるが，この分類についての根拠は前に述べたように，相手の動作に応じて身体を迅速に移動し，身の安全を計り，速かに反撃することである。身体の移動後はいかなる態勢からでも打突が実施されなければならない。従って身体の移動（上体と竹刀の振幅との関連を含め）を中心とした可能な反撃打突を指導教習することのほうが，技術の個々の名称による単独技術教習方法より合理的であろうと考えられるからである。更に個々の名称に属さないような自由な技術の

指導が可能ではないかと考えられるからである。

左　技――すりあげ技，打落し技，返し技，抜き技，押え技，出ばな技（出がしら技）

右　技――左技と同じ

左　技（右技も含めて）

左技に分類した場合に含まれる従来の技術の名称は左右共通して実施され得ることである。すなわち左右同じ技術の打突が可能であるということである（小手技を除く）。勿論動作として斜め前，斜め後の移動反撃技術もこの中に含まれるのであるが，これらの技術が個々の独立した名称によって個別に指導され教習されている弊害として，その過程において指導者の得意とする技術は重点的に実施され，そうでない不得意な技術は比較的教習時間が少なくなることは否定できない。また左右の連関性（バランス）が失われ，左右いずれかに偏してくることも否定できない。競技においては技術の名称判定ができない打突が多く実施されており，それは競技者自身が練習の積み重ねの結果として無意識の中に相手との動作の関連において実施されているのが実情であろう。左右同一にできる技術でありながら一方に偏しているのである。具体的な一例をあげてみると逆胴（相手の左胴）の打突（返し胴，抜き胴）がほとんど実施されず，わずかに上段からの打突に対して実施されていることが散見されるくらいのものである。また同様なことが受け方においても言えるであろう。たとえば相手の面打突に対して返し胴を実施する場合に，相手の右胴を打突するため体を右に移動し，竹刀の受け方もしたがって表で受けて返す技術が一般的に多く実施されている。これが返し胴の一般的な定型となっているのではないだろうか。

以上の例は個々技術の名称による教習の一つの要素となっていることから生ずる結果であろう。更に具体的にみた場合，

相手の面打突に対して面を打突しようとするときの左技，右技について，従来教習されている主技術の名称は抜き面，すりあげ面（主として右）であるが，新しい分類は出ばな面（左右）を加える。

方法として体を左右，斜め前，斜め後に移動することを重点にする。留意すべき点はこの移動のときに前述のごとく剣先が立たないようにすることである。剣先の立つことのないようにするという意味は相手の動作に対して自分も打突しようとする意志が早く起き，体の移動を忘れ，まず竹刀の動きで防ぐという意味である。竹刀の立つことにより相手に乗ぜられ隙ができ，打突を受けることが非常に多い。このような竹刀の動きを少なくするの意味において，少し半身の構え方，剣先を少し低目にするほうが合理的な動きをするのに便利ではないだろうか。しかしこのような構え方は面については相手に乗ぜられる機会が多いものであるが，これを防ぐ意味でも打突より体移動を忘れないことにより防止できるものであろう。相手と真正面に向かい

合ったまま移動するのではなく，打突面積を少なくするため半身になり移動することである。従って常に相手に対して半身になって向かった位置にあることになる。

体を左移動することによって面打突のできる技術は相手の面打突動作が事前に察せられる場合には出ばな面（斜め前，相手右面）であり，遅れたときはすりあげ面（裏ですりあげ相手右面）であり，更に遅れたときは抜き面(斜め後，相手右面）である。このような一連の面打突の教習は個々の分析説明は勿論必要であるが，実施においては約束事である面打突に対して，教習者自身の動きによって自由に実施する方がより合理的であろう。各自の技術差によってもっとも適合した技術を各自が自然に会得できるようになるであろう。

体の右移動においても同様な打突が可能であり，従って相手の面打突に対し，充分に左右の移動（斜めをも含めて）打突ができるように基礎を作る必要がある。

次に面打突に対して胴についてみる。

相手の面打突に対して胴打突は返し胴，抜き胴が主な技術である。この胴打突についても前述の面打突と同様なことがいえる。現在相手右胴を打突することにのみ指導教習の重点がおかれているようであるが，これは，相手の構え方が中段のときに右腕が前になっており右胴が打突しやすい，左胴は左腕下にあり打突困難である，右胴打突は左胴に比較して難かしいので練習の必要があり，この練習が習性となってくる，等々の理由により現在に及んでいるものであろう。従って一方に偏した技術になっているような感じがする（初心者においては指導がなければ逆胴の打突が非常に多く，この逆胴打突が本能的な打突であろう)。体移動を中心とした左技，右技を考えた場合にこのような弊害はなくなり，左右のバランスのとれた胴打突技術の実施ができる利益がある。左腕下に胴がかくれ，打突が困難であるということも抜き胴・返し胴の技術から考えてもなんら問題にならないであろう。体を左移動し抜き胴，返し胴（竹刀の表裏で受ける)，右移動し抜き胴，返し胴（竹刀の表裏で受ける）である。特に竹刀の裏で受け返す技術は相手からの小手打突を防ぐ意味においても充分練習を重ねる必要があるのではないだろうか。

このように考えた場合，左右，斜めの移動，竹刀の受け方等のバランスのとれた基本が充分会得できれば他の技術等にも直ちに応用ができるであろう。特に現在画一的に実施されている技術より一歩進んだ左右のバランスのとれた技術の活用がなされ，変化ある自由な技術へと近づくものではないだろうか。

参考文献

(1) 金子近次：剣道学，資文堂書店，昭和4年。
(2) 下川　潮：剣道の発達，大日本武徳会本部，大正14年。
(3) 河野　毅：剣術の心理学的研究，成武堂，昭和2年。